2017年日韓歴史研究者共同学術会議に参加して

堀内　稔

2017 年 8 月 4 日（金）、5 日（土）の両日、韓国の群山で日韓歴史研究者共同学術会議が行われた。この会議は、韓日民族問題学会と在日朝鮮人運動史研究会の関東および関西部会 3 者の共同主催で、2 年毎に各団体が交替で主となって開催するもの。私は関西部会の一員としてこれに参加した。以下はこの会議の報告および個人的旅行記である。

釜山から群山へ

前日の 3 日午後、釜山の金海空港に到着、軽電鉄と地下鉄で強制動員歴史館に向かった。ソウルではなく釜山を出発地としたのは、釜山の崔永鎬さんが車で群山まで連れていってくれるというので、それに便乗したのである。強制動員歴史館で崔永鎬さんと飛田さんに合流、展示物を見て回った。ソウルの「戦争と女性の人権博物館」のようなこぢんまりしたものを想定していたが、案外立派な建物であった。「これだけ大きい建物だと維持が大変」という、設立関係者でもある崔永鎬さんの言葉が気になった。

飛田さんの写真もある強制動員歴史館

夜は崔永鎬さんの知り合い 3 名と中華料理店で会食。その席での話はほぼ韓国語で、分かったような分からないような。また、かつてカザフスタンを旅行した時も感じたことだが、同じ中華料理でも国によってこんなにも味が違うものかと。

翌朝、夜遅く東横インホテルに到着した同じ関西部会の塚﨑さんと私、飛田さんの 3 名は、地下鉄の久瑞駅で待ち合わせた崔永鎬さんの車に乗り込み、一路群山へ。途中春香伝で有名な南原で昼食をとろうとして、まちがって南原の手前の池谷というところで高速を下りてしまいかなりの時間的ロス。池谷は韓国語ではヂゴクと発音するので、私たちは「地獄」を見たと冗談をいいあった。南原では葛冷麺を食べた。食堂の近くには葛汁を販売している店もあったから、この附近は葛の産地なのかもしれない。

南原で食べた葛冷麺

怡堂美術館での発表会

「地獄」の時間的ロスで 2 時の開会に間に合わないのではと心配したが、カーナビのおかげで何とか開会前に会場の怡堂（イダン）美術館に着いた。美術館といっても普通の建物（元は銭湯だったらしい）を改造したもので、美術館らしくなく非常に分かりにくい。

会場の怡堂美術館

会場はいつものように発表者の席と聴衆の席が対峙する形ではなく、聴衆の席が壁に向かってならんでいるだけ。とまどったが、すぐにその理由がわかった。発表者 5 人のうち 1 人を除いて、パワーポイントや映像を使った報告で壁が舞台だったのだ。パワーポイントを使わないただ 1 人の報告者は私。報告者および報告のテーマはつぎの通りである。

会場での発表風景

①在日企業家像：パチンコを変えた男 韓裕－李光宰（関東部会）
②映像紹介：1930 年代の群山－水野直樹（関西部会）
③群山 近代歴史文化資源の活用経過と課題－金旻榮（群山大学）
④光州学生運動と京都･両洋中学の朝鮮人留学生－堀内稔（関西部会）
⑤国内所在のアジア太平洋戦争遺跡の活用情況－鄭恵瓊（日帝強制動員＆平和研究会）
上映会 「憤怒」（北朝鮮の日本軍慰安婦問題）－安海龍（監督）

発表時間は各 30 分と短い。報告は私を除いてすべて韓国語。ただ「パチンコを変えた男

韓裕」のパワーポイントの説明は日本語だった。以下、印象に残った報告の概要、若干の感想を述べてみたい。

「パチンコ」の報告は、それまで「低級娯楽」であったパチンコを、韓昌祐、韓裕親子がマルハンという会社を通して女性でも遊べる娯楽産業に変え、財をなしたというもの。ただ韓昌祐の場合、パチンコの経営的な話だけでなく、「季刊青丘」や「青丘学術論集」など文化面での関わりを加味すればよかったように思う。

群山の近代歴史文化遺産については、2015 年のむくげの会の群山フィールドワークで、日本人家屋などを群山観光の資源にすることで、群山の観光が活性化したという朴孟洙さんの話を思い出しながら聞いた。「憤怒」は、伊藤孝司氏の映像インタビュー記録から始まるドキュメンタリーで、情報が少ない北朝鮮の慰安婦に関するものだけに非常に興味深かった。なお、私の京都･両洋中学の朝鮮人留学生については、「むくげ通信」265 号を参照してほしい。

群山での宿所は会場の美術館から徒歩で 6、7 分のところにある港都（ハンド）ホテル。晩餐会の会場はその近くの「楽園」で韓国料理を堪能した。これまで名前だけは知っていたが食べたことがい清麹醤(チョングクチャン＝納豆汁)も初めて賞味した。コルベンイも食べた。韓国ではメールアドレスに付く「@」をコルベンイというので、どんな貝かと興味があったがタニシの親玉みたいな貝だった。後で調べるとコルベンイとは巻き貝の総称のようで、「@」に似た形のものもあるとのこと。

群山フィールドワーク

翌日は「ホテル」の近くの「ハニルオク」（漢字では韓日屋かな？）で朝食を食べた後、30 数名がチャーターしたバスでフィールドワークに出発した。「ハニルオク」での朝食は大根スープがとても美味しく、次の日の朝食もそこで食べた。朝早くからひっきりなしに客が訪れ、店は大繁盛していた。この店の向かい側には、映画「八月のクリスマス」で有名になった小さな写真館の建物がある。

映画で有名になった写真館

群山の市街を抜け海岸沿いに進むと、一面大平原でところどころにこんもり盛り上がったところがある。もともとは海だったところを埋め立てたもので、盛り上がった所は島のなごりだという。この干拓地はセマングムと呼ばれ、島には古代遺跡が残るが、この干拓がいつ頃から始められたのか。2 番目に訪ねた群山大学博物館にはその説明があったような気がするが……。群山大学博物館は、この地方の古代から現代に至る歴史的遺物を展示したこじんまりした博物館。前日の発表会の会場の変更を知らず、何人かはこの群山大学まで来たとのこと。

今回のフィールドワークのポイントは、植民地時代の日本人地主の農場の痕跡、すなわち不二農村、熊本農場、嶋谷農場の跡地の訪問である。米所である全羅北道には日本人の大小農場がひしめいていた。法人では東洋拓殖会社をはじめ、不二興業、右近商事などの大農場があり、個人では熊本農場を筆頭に多木農場、嶋谷農場、細川農場などが続く。

最初の訪問地であるムンチャン初等学校、沃溝貯水池は不二興業の農場跡地で、キーワードは干拓である。大阪の藤本合資会社（後の不二興業）の代表社員であった藤井貫太郎は集団農業移民論者で、東拓の農業移民の失敗に鑑み、既成の農地から朝鮮農民を追い出して移民させるのではなく、干拓によって新たに得られた土地に新たに農民を移民させる方式をとった。こうして作られたのがムンチャン初等学校付近にあった不二農村と、貯水池をはさんでその南側にあった沃溝農場で、不二農村には日本の各地から集められた農民が、沃溝農場には朝鮮人が移住した。日本人の入植移民には膨大な補助金が提供されたのに対し、朝鮮人移民には家屋購入費の補助が唯一であったという（李圭洙「植民地期朝鮮にお

沃溝貯水池（下の地図の中央部）

不二農村と沃溝農場

ける集団農業移民の展開－不二農村を中心に」『朝鮮史研究会論文集』33)。

次は熊本利平の別荘だった「李永春の家」であるが、これについては「熊本利平と朝鮮」で詳しく紹介したので省略する。ただ、今回の訪問では関東部会の樋口雄一さんが研究者魂を発揮した。なんとウィンドウ式の書棚に飾ってあった李永春の書籍を見せて欲しいと頼みこんで、実際に見せてもらったのである。

次の訪問地はパルサン初等学校で、ここは嶋谷農場の跡地である。学校の裏手には、嶋谷が集めた新羅時代の石塔、石人像ほか数々の石像物があるほか、倉庫もそのまま残っている。

嶋谷農場跡の石人像

嶋谷農場についてもう少し詳しくみてみよう。嶋谷八十八（1962-1944）は山口県出身で、同県内で薬種商、酒造業などを行い、由宇銀行監査役、由宇商業合資会社社長などの職にあった。1903 年満州･朝鮮を視察した後群山に居住し、1904 年からは沃溝郡の土地を買収し続け、1927 年に嶋谷農事（沃溝郡開井面下長里）を設立した。1928 年現在、約 1,600 町歩の農場を持ち、小作人は 1,400 人だった。1931 年に嶋谷農場と改称した。彼は群山居留民団議長、臨益南部水利組合長、臨益水利組合理事を歴任した（広瀬貞三「植民地期朝鮮における万頃江改修工事と土地収用令」)。

昼食は「オンゴジプ」(頑固とか意固地の意）という名の食堂。食堂へ向かう道すがら、サルスベリが鮮やかなピンクの花を咲かせていてとてもきれいだった。

昼食を食べたオンゴジプ

このオンゴジプは廃校になった学校を利用した食堂で、テレビに出て有名なのか、玄関や廊下にはその類いの写真がいくつも飾られていた。広い校舎跡を利用して、食堂だけでなく民画風紙細工の展示、土産物なども販売していた。

フィールドワークはこの食堂まで。この日のうちにソウルへ帰る人のために高速バスターミナルに向かう。途中、群山出身の小説家である蔡萬植文学館をバスの中からだけでも見ようということだったが、できずじまいでバスターミナルに着いてしまった。

ホテル港都で 2 時間ほど休息して夕食へ。どこで何を食べたのか思い出せないが、二次会の席上である韓国人女性が、前号の「むくげ通信」で私が書いた露店商運動について、「この運動には賛否両論がある」と言っていたのが印象に残っている。このあと 7 人ほどでカラオケに行き、おおいに歌った。

蔡萬植と趙廷来の記念館

翌日の釜山への帰りの車には、行きの 3 人に加えわが朝鮮史「業界」のゴシップネタの豊富な宋連玉さんも加わり、にぎやかな道中となった。途中、昨日のフィールドワーク行けなかった蔡萬植文学館、さらには宝城郡筏橋にある太白山脈文学館を訪ねた。蔡萬植の代表作『濁流』は 1930 年代の社会相を集約した傑作といわれる。また、1980 年代に書かれた趙廷来の大河小説「太白山脈」にちなんだ太白山脈文学館では、うずたかく積み上げられた趙廷来の肉筆原稿の山の展示に驚いた。

蔡萬植文学館にて

昼食はこの文学館近くのコマク専門店で。コマクとは寿司ネタの赤貝を小さくしたような貝だ。ちなみに赤貝はセコマク。カキと同じように冬季しかないというので、代わりに太刀魚の焼きものを注文したが、出てくるおかずの皿が数、味ともはんぱではなかった。釜山へ帰って東來名物のパジョン（ネギのお好み焼き）を、日本人も行くような有名な店で食べたが、おかずの皿は昼食の店に比べかなりみすぼらしかった。

コマクの店で出てきたおかず

翌朝、台風を心配しながら飛田さんとふたりで金海空港へ。風のため機体はかなり揺れたが、12 時半過ぎになんとか関空に到着できた。ほとんどの便の欠航で関空は閑散としていた。（終）